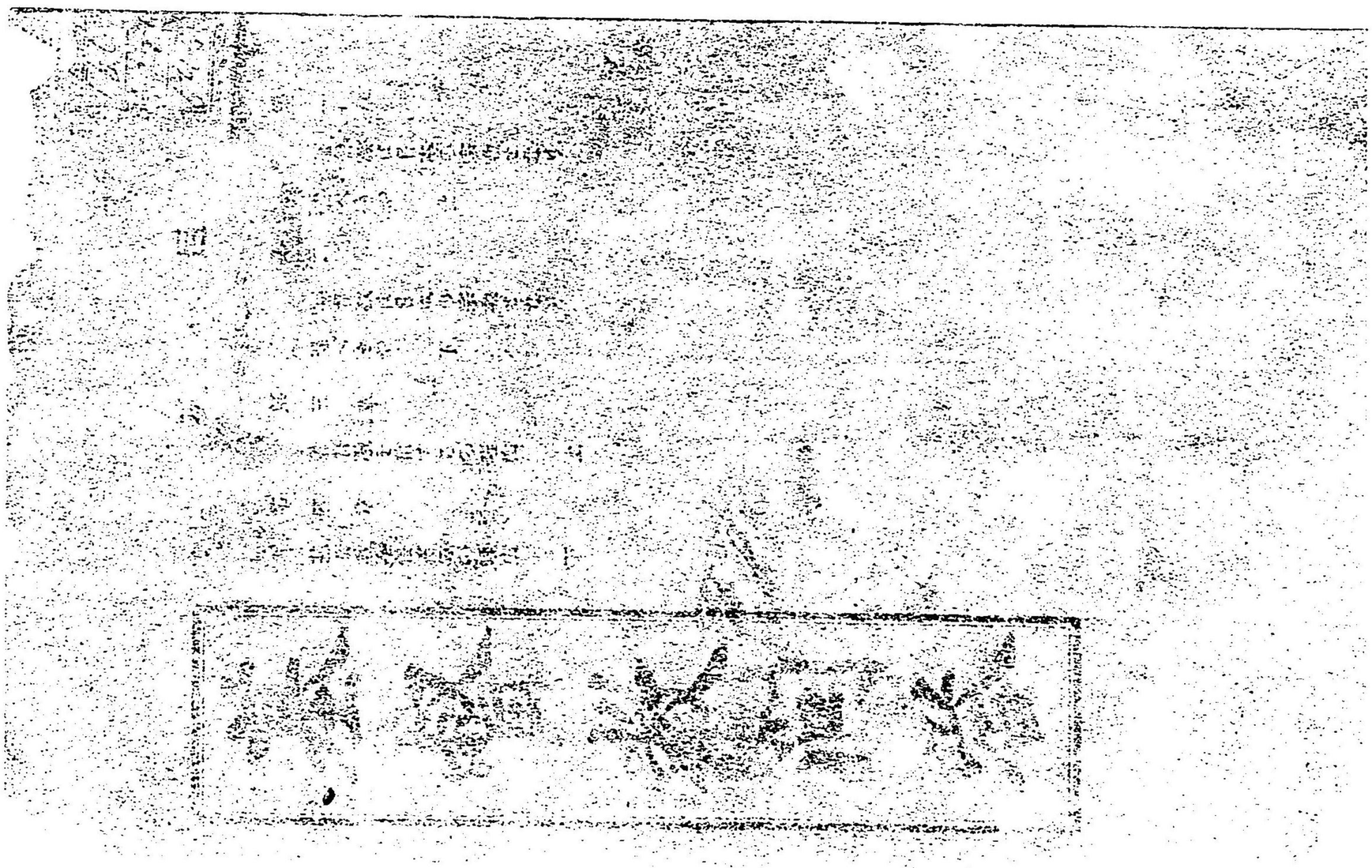
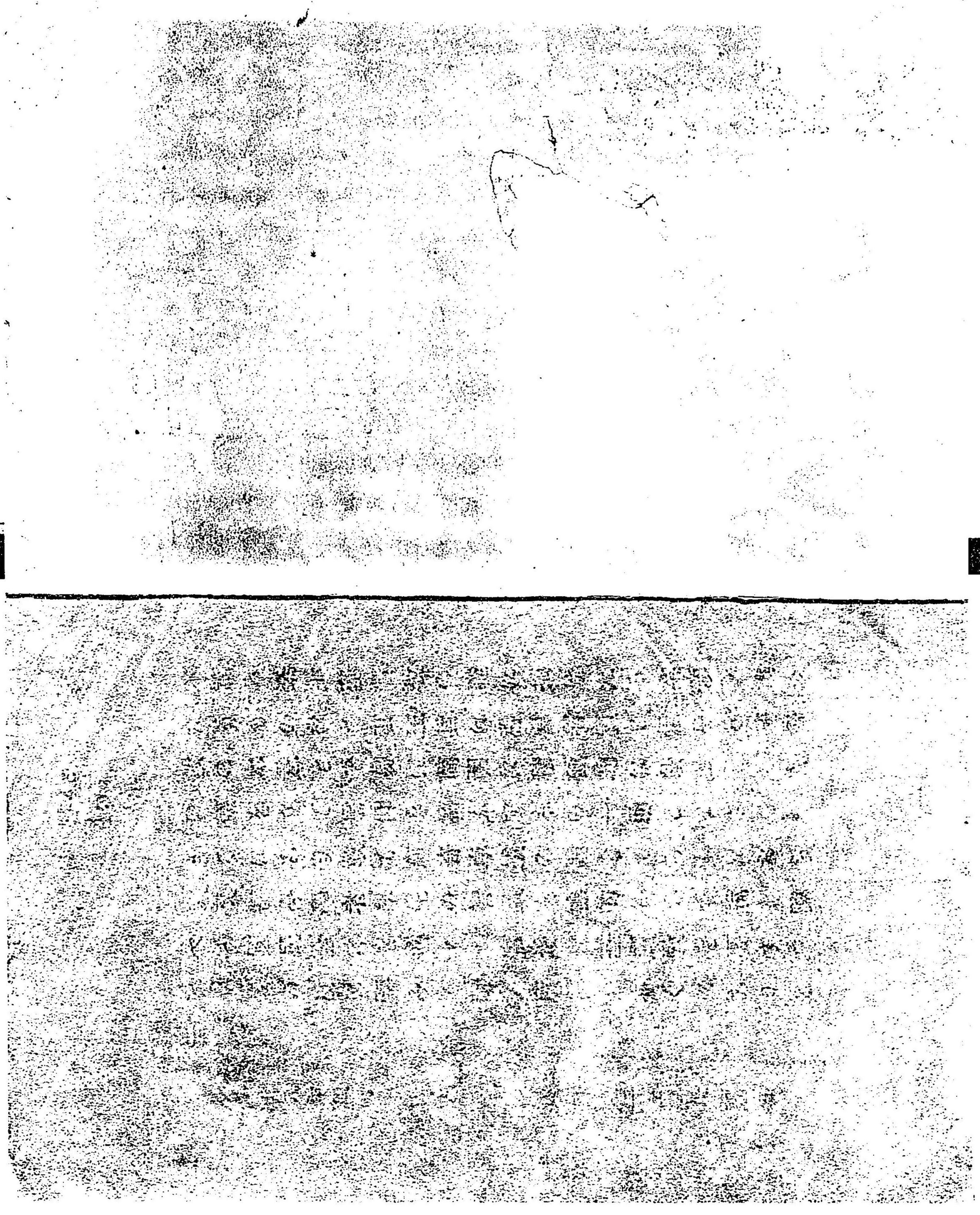




基督教問答　目次

第一章　基督教ハ日本の宗教となり得べきや　上
一、其理由如何。
二、基督教の眞價如何。
三、在來の宗教ゟ眞價乏しき証據。
第二章　基督教ハ日本の宗教となり得べきや　下
一、日本ゟ眞價充てる宗教を要する所以。
二、我國民ハ大宗教を嚼味同化するの力ありや
第三章　基督教を信ぜるの理由　上

目次

一、基督教を信ぜるい何んの爲なりや
二、基督教を信ぜざるも人道よ不足なきよあらずや。
三、其不足とい何んぞや。
四、天とい何ぞや。
五、神の果してありといふ証據如何。

第四章　基督教と信ぜるの理由　下

一、神い唯一なりと云ふは如何。
二、神い人の拜すべきものなりや。
三、神を拜するの道如何。
四、眞心さへあらば神を拜せずともよきにあらざや。
五、神を拜するよりて眞心の立つ理由如何。

基督教問答

松尾音次郎著

第一章　基督教は日本の宗教となり得べきや　上

問　基督教は日本の宗教となり得べきや。

答　此い大問題なり。かるく〳〵しく答へ難し。然りと雖ども余は信ず。必ず日本の宗教となり得べしと。

斯く申せば或は以て我田に水を引くの私論なりと爲ん者もあるべきなれども余い決して私論を好まず。正々堂々として基督教を説んと欲するものなり。もし果して基督教をして人生に益なく。我日本の害となり。我人民の不爲となるものならば。余い之を排斥するに肯へ

て吾ならざらんと欲そ。蓋し宗教なるものゝ。人間の爲め宗教よりして宗教の爲の人間にあらず。故よ苟も人間よ益なくして害あるが如きものならば。之を排斥するよ何かあらん。固より當然の事と謂つべし。然り而して。余がこゝよ基督教を指して。日本の宗教となり得べしと云ふものゝ。ろも〳〵深き子細のあることよして。決して一時の空想にあらず。則ち我國の益となり。我民の幸となるもの。斯教を外にして他におれあるべしとも覺へざる理由あれゞあり。ゆめ〳〵我田に水を引くの僻論となすべからず。

問　然らば問ふ。其理由如何。

答　まづ第一基督教に眞價あること。第二日本在來の教に眞價乏しきこと。第三我日本に眞價充實る宗教を要すること。第四我國民ゝよく大宗教を嚼味同化するの力あること。第五世界的文明の趨勢は。我國を驅つて基督教に入らしむるを等にして。言ひ更ふれば。基督教は我日本の宗教となるべき資格あり。又我日本人は基督教を受くるの能力あり。又受けざるべからざるの必要あるを謂ふなり。

基督教の眞價とは。そのまことのねうちと云ふことにて。まことのねうちとは。其本性よ固有する生命的の能力を云ふ。日本在來の宗教ゝ。重よ神儒佛の三教を指し。其眞價乏しきとゝ。今日文明の教育を受けたる人民の道心を滿足せしむるよ足らざるをいふ。我日本よ眞價ある宗教を要するとゝ。凡そ人間ゝ宗教なくして立ちゆかざる動物なれば。われら日本人も決して其教を免ること能はず。必ずまことの宗教を必要とするゝ論なきのみならず。殊よ今日以後の日本よゝ。一

層眞正の宗教を要するの道理あるをいふ。大宗教を嚼味同化するの力ありとい。われら同胞い古より宗教を解するの力に富みて。隨分種々雜多の教ょ接することありしも。よく之を嚙み占め味ひ。以て其眞意をさとりたれば。今後の基督教とても。必ずよく之を會得して我物となすべきをいふ。世界的文明の趨勢云々といい。今日の文明力い世界萬國を一つょ丸めて。睦み親ましめ。彼我の長短をくらべて。互ひょ相補益するの道ょ進ましむるものなれば。我國も世界ょ顔出したる以上。到底其沿々の文明力ょ反抗ふ能いず。隨つて基督教の勢力ょも反抗ふ能いずといふものい。基督教は此世界的文明の同伴者なればなりと云ふょあり。

問　基督教の眞價あるところを一々聞かむ。

答　第一。基督教の起元より。今日までの歷史を見て知るべし。第二。其教理の普通にして宇宙的あることを。第三。其教旨の實地的にして須臾も離るべからざることを。第四。基督の至聖。至大なる人物のことを。第五神の靈。人の靈に感動くことを。第六聖書の藏むるところ神の點示にいでゝ。万世の規鑑たる事等を見て知るべし。

(一)人の大畧承知する如く。基督教の起元い實ょ微々たるものなり。則ち千八百有餘年のむかし。猶太國の一小村なざれの片隅ょ於て。大工の家ょ生れ。よいひ三十歳ょ到るまでい。父の家ょありて父の業を營み。肯へて常人と異ならざりし一匹夫耶蘇が。眇然たる軀を以て。天國い近し。悔改めよと宣へ傳へ。僅ょ漁師稅關吏のともがら十二人を集めて弟子となし。三年の間こゝかしこと經廻りて。種々の困苦。迫害。罵詈。讒謗の中ょ身を置き。終ょ頑民の爲めょ十字架ょつけられ畢んぬ。

これ其起元なり。而して一旦の弟子もちり〳〵ゝ遁げ失せ。殆んど斯教の根基こゝゝ絶えあん計りの有樣とゝ成たりき。然るゝいくばくもなくして。彼散りたるものもをい〳〵集り。集ると共ゝ。又信仰の心もをい〳〵起り。漸くゝして一團体となりて。社會ゝ存する事とゝなりしと雖ども。其前途や。尙遼遠ゝして。危く弱く望み少なきものゝて。人間の目よりゝ。到底世界の大宗教となるべしなどとゝ夢思ゝれざりき。然るゝもろ〳〵の障碍を排し去て。一歩ゝ一歩より進み。或ゝ火の中。水の中。肉裂け。血飛び。あらゆる慘虐の中ゝありても。所謂殉教者の血ゝ。教會の礎となりて。愛と。望と。信仰の力ゝ。しばるゝ縛られ。つなぐゝ繫がれ。歷へんと欲してます〳〵あがり。消さんと欲してい〳〵ゝ燃え。遂ゝ紀元三百年の頃より。羅馬の大帝國を着々感化し。上天子より下庶人ゝ到まで。を大抵歸依信聽せしめ。これと同時ゝ歐州の各方へも沿々として其教化を布き及ぼせり。以後數百年の間。成程幾多の弊害も混じ來しゝ非ざと雖。又よくるゝ〳〵てるを起して。宗教の大改革を行ゝしめ。此一擧ゝよりて。歐州全体の惰眠をさまし。社會百般の事柄より。學術。技藝。政治。法律等ゝ到るまても。悉く改善の運ゝ向ゝしめ。こゝゝ近世文明の端緒を開きたり。爾來基督教の勢力ゝ。駸々乎として止まる所を知らず。時ゝ盛衰の觀なきゝしもあらざと雖ども。よく全歐を風靡して南北亞米利加ゝ及び。南洋諸島ゝ云ふゝ及ばす。日本。支那。朝鮮ゝまで及びて。尙底止する所を知らざるなり。其間或ゝじよん、ゝうあーどを起して監獄改良の大義を唱へしめ。或ゝないちんげーるを呼びをこして。赤十字社の根基をすえしめ。其他もろもろの慈善事業。社會改良事業。外國傳道事業等を奮ひたゝしめて。その光輝燦爛たるものあり。之を一々枚擧するゝ遑あらずと雖ども。其勢力の著大なるは疑ふべくもあらず。顧ふゝ其始かれが如く微ゝして。其終かくの如く盛榮なるものは。蓋し世ゝ比類なかるべし。これ正し

く斯教が其本性より固有する生命的の能力を証するものとして此能力則ち基督教の眞價たるなり。

(二)其教理の普通として宇宙的なるあとゝゝ解し易く。通じ易く。時をならず。處を問はず。昔より。今より。西洋より。東洋より。學者より。無學者より。男にも。女にも。小兒より。老人にも。野蠻より。文明より。寒國より。暖國より。大陸より。小陸より。何れの地。何れの人種にも通用して。聊か障碍なきをいふ。宗教よりてゝ。學者より分れども。無學者より分らぬ。愚者より通すれども。智者より通せず。我日本より貴けれども。外國より貴からず。保守國より適すれども。進歩國より適せず。閑々たる隱居者流より用あれども。有爲壯年の者には不用なる者あり。唯基督教や普通として宇宙的なり。何地いかなる時。如何なる人にも。凡て信する者にのみ之を權を賜て神の子となし肯て。誰彼の區別をたてず。是實に斯教の本性より固有する能力より外ならぬして。此能力則ち基督教の眞價たるなり。

(三)其教旨の實地的にして須臾も離るべからざることとゝ。譬へば渴して水を求め。飢て食を慕ふが如きをいふ。則ちなくてかなはぬものとの謂なり。或ゝ基督教を以て。一切我身より關係なし。全く餘處事なりと考ふものありと雖ども。此ゝ怪しからぬ誤想なり。蓋し基督教ゝ人道と人道の極意を示すものにて。其本元天(神)よりいでゝ更ふべからざる。日常必須の道たるとゝ。まさに後章に於て論せんとするが如し而して人のこゝに氣付ざるものゝ猶暗夜に提燈かゝし禮いふを知つて。日々照し玉ふ日輪の禮いふを知らざるが如し。さりとてゝ情なきことゝもなり。夫れ基督教の眞價や。則ちこの人の日常欠くべからざるものたるの点に存す。

(四)基督の至聖至大なる人物なることゝ。古來すでに定論あり。佛國のるうろー如き反對論者すらも。「基督ゝ神の如くに死せり」と云へり。基

督教ハ全く此人物の上ニ立つものにて。名つけて基督教といふハ之か爲なり。此人物や。人類の歴史を一變したりとハ歴史家の証する所。又斯教起つて以來。幾億万人の信徒。彼を神人としてあがめまつり。彼に渴仰隨歸して。其罪を救ハれ。其靈生ニ入れられしものなり。彼ハ實ニ神ニ立てられて我儕の智慧。また義。また聖き。亦贖となり。賜へり此贖ひや。他教の決して有つ能ハざる所にして。特り斯教の專有する所。これを基督教眞價の最大要素なりとす。

(四)。神の靈人の靈ニ感動くとハ。基督教の奥義をいふ。保羅曰く。それ人の情ハ其中ニある靈の外ニ誰か之を知るものあらんや。かくの如く。神の情ハ神の靈の外ニ知るものなしと。されバ基督教の眞味。則ち神の秘奥ニ通せんとならバ。神の靈を受けざるべからざるハ。猶ほ天文學者が天文鏡を得ざるべからざるが如し。且又われらハ啻ニ神の情を究知るべきのみならず。直ちニ神ニ接して其權能を受くべきなり。

もし此權能を受けざる時ハ。恰も葡萄の蔓が其幹より切離されたる如く。われら何事をもなす能ハざるなり。又譬へバ。鐵窓の中ニとられ居る鷲の如し。彼れ万里を一飛びするの天性ありと雖ども。奈何せん鐵窓の中に閉ちこめられてハ又詮方もなし。而かも彼れ時ありてか。其鋭き眼を天の一方に注ぎ。かの青空をニらんで將に飛んとして能ハざ。悄然として物思ハしげニ翼を收むるよと見る間ニ。又もや暫くして天性の本能。俄かニ眼をさまし來るかの如く。奮然として翼をひろげて羽ばたきし。大ひニ一躍を試んとするや。平生目ニも見えざる足の鐵鎖。頑然として堅くからみて如何ともなす能ハざ。またまた悄然として坐るが如き。アヽ此大空の鳥をして。自在ニ大空ニ飛揚せしむるものハ誰の力ぞや。これ彼が自力ニしあらずして。自力以上の力則ち人の來つて其鐵鎖を切り。其鐵窓の戸を開くニあり。そもそれ吾人が人生ニ於ける實狀ニあらずや。もとく人間天眞の靈ハ。直ち

に靈界に飛躍して神に直接するの性を有するものありと雖ども。罪と。惡と。もろ〳〵の肉慾煩惱とい。乃ち鐵鎖となり。鐵窓となりて以て我を引き据え。たゝんと欲すれば又引きすえ。到底自ら如何ともなし能いさふしむ此際此時。乃ち我を解きて自由自在に。天上天下の靈界に飛ひ翔らしむるものゝ。これ只神靈のあるのみ。夫れ神の聖靈。人の靈性と相感動することゝ。まことに實事中の實事にして。基督教の眞價。則ちこゝにあつて存ずと知るべし。

(六)。聖書い基督教の經典にして。世界。万世唯一の書なり。其人心を啓發して本心と義務の光を照り輝かしめ。神を畏れて。其聖旨を悟了り。一視同仁。四海兄弟の大義を知得せしむるもの此聖書に若くいなし。むかし。魯國い。壓制の君主專制國なり。貧困死に瀕するの奴隷其中にみちたりき。大帝あれきさんどる。尙幼年にましませし時。父帝にこらすの前にいでゝ。甚だ沈思の姿ありき。父帝怪んで其故を問ひ玉ふに。僕れなる奴隷の事にて候。われ他日王位に即んにいれば必ず彼等を救ふべし。と答へ玉へり。此答い父帝を初め列座の面々をいたく驚かしめ。父帝問ふに。何に由りて左る感想を起せしやを以てし玉ひしに。答へて。聖書を讀みて凡ての人間い皆同胞兄弟なりとの敎旨を深く肝銘したればなり。と果して此帝。王位に即き玉ふに及んでや。大ひに奴隷救助の道を定め玉へり。聖書い帝王の心も憚らずして入ること此の如し。聖書い聖靈の劍にして。人の骨髓筋節までも突き通すなり。うの單純平易にして。而も莊重。威嚴なる。其妙味と。純潔と。光明と。敵智とみてる。之を讀むことといよ〳〵久ふして。但意味深長なるを覺ゆ。アゝ基督教眞價の存する所。亦誰れか此聖書にあるを疑いんや。

問　日本在來の宗教に眞價乏しき証據如何。

答　其証據歷々として見るべし。そも〳〵明治維新の改革と共に神。儒。佛教の上に非常なる衰頽を來し。

殆んど國民の眷顧を失して僅に其空名を擁する
の樣に陷りしは明白なる事實なり。
然るに最近六七年このかた。國粹保存論の喧呼せらるゝと共に漸く
再興の兆を現し。引續ひて國家主義なるものゝ稱道せらるゝよりて
一層其氣勢回復の便を得たりと雖ども。斯る一時の人氣の頼むに
足らざるも誰しも承知する所なるべし。或人は之を以て燈火の將に
滅んとしてパッと光を放つに比喩たり。其は兎も角も。今日の神儒佛
教を見て。その勢力の增大をいふは皆過てり。余は徐ろに此等の諸教
が。今日國民の多數間に如何なる實事となり。如何なる動力となりて
存在するやを知らんと欲す。言ひ更ふれば。僧侶若しくは神宮輩の口
に喋々する所を聞ば。隨分巧みなる議論をなし。いろ〳〵六ケ敷こと
を云ふと雖ども。此は畢竟小數專門家の腦裡に止まり。一般大多數の
信者に何の了解もなく。又影響もなく。事實に存せざる空物たるに過

ざれば。これ余輩の關する所にあらず。余輩は只實地によつてかの三教
が其信者の肉となり。血となり。活きて動く所の能力を知らんと欲す。
若しこれを知ることを得ば。其眞價の乏しきや否やは自ら明白とな
らん。つら〳〵佛教の事實とあり。民間に現はるゝ所を察するに。其大
多數の信者は。彌陀釋迦。觀音。勢至。地藏等の塑像。圖畫を死者の靈牌と
共に壇上に安置し。點燈。供華し。何事を說るか知らざる經偈を高誦し
彼岸。于闐盈。葬事年忌等には寺院に詣で。若しくは之を請待し。布施な
るものを與へて經文を誦せしむるに過ず。たまに教育ある人物の
信仰そるありと雖ども。概して文盲なる婦人。老人。隱人等なり。靑年に
して信ずる者あるが如きは。一時の好奇心。若しくは一種の學問とし
て研究し。又は依て以て糊口せんとする者のみ。其道德的感化や。甚だ
薄く。乏しくして。若しありとせば。有爲の元氣を弱めて涙もろくなさ
しむる位の事なり。又神道とても同じことにて。只幾等か勇しく目出

度と云ふ感覺を起さしむるの差あるのみ。儒道い道德の實行を重んずと雖ども。民間ま行いるゝこと殆んど稀なるを奈何せん。之を要するま。日本在來の敎い(一)多く形式ま流れて一個の習慣となり了り(二)道德を言いさるまさらざるも。之を實行せしむるの動力ま乏しく(三)信仰い神佛より御利益を受くる爲のものなりとの觀念。一般ま行はれて其御利益い實德ま伴ふとの義を實地に解する者稀あり。且又(四)經文を熟讀して之を玩味する者少なく。殆んど經文なきま同じ(五)而して因襲の久しき固陋狹隘無智。排外の氣自ら之と連着して。到底第二十世紀の文運と一致すべくもあらず。これ實地の觀察より。余輩が日本在來の敎ま眞價乏しといふ所以なり

第二章　基督敎は日本の宗敎となり得べきや　下

問　わが日本に眞價充てる宗敎を要する所以を委しく聞む。

答　わが日本に眞價充てる宗敎を要する所以を語る前に先づ凡そ人間たるものに。宗敎の欠くべからざる所以を語るべし。そは日本國は取も直さず人間の國に外ならざればなり。

夫れ人間ま宗敎の欠くべからざる所以い。家屋ま大黑柱の欠くべからざるが如し。其眞中ま堅く立ちて拔くべからず。若し大黑柱まして動き初めんか。全家擧て傾覆るべし。其家根も。瓦も。壁も皆剝げ。戸も障

子も立合ざるべし、丁度その如く、人よして信神の念滅ぶる時い義理も人情も愛もなさけも皆失すべし。而してたゝ骸骨の如き人非人のみ殘らん。然るよ世い不思議なるものかな。此大切なる宗教を輕蔑て自ら「我い無宗教家なり。不信者なり。世よ神あることなし。何んぞ宗教のある理あらんや」など稱ふるものわり。然りと雖彼れ其本然の至情よ於てい判然に其口言ふ所の實なきを証明す。悲痛艱難辛苦死生の最期に於て——迷の幕の眼前より落ち去る時よ於て「わが神よ」「わが宗教よ」との聲い自然よ其唇頭より逆るなり。蓋し人の宗教を不用なりと思ふよ到るい畢竟世事の多忙に取紛れて其本心を省察るよ暇あらず。隨つて終に神を忘却したるよよるか。若くい人生の富貴權柄淫乱の樂よ耽りて。その智力を破壞され。其全体全心を汚泥の中よ引きづり込めるよよるか。但しい又少しく學問よ首をさし出し。我知らぬ高慢の癖よ陷り。懐疑的嘲笑を含みて「神さまと云ふか。此い中古の頃にい甚大事なる思想なりき。されど今や既に其用なし。中古よ於てい神の宗教い大いなる權威を有ち。又大いなる働作をもなしたり。されど其い既よ過き去りて古話といありたり。而して今や全くこれを棄つべきの時節到來せり」など。口よ出任せの虚言を放つよよるなり。請ふ吾人をして暫く考を靜蕭あらしめよ。何をか宗教といふ。宗教とい神と人とを和合せしむる經的の大事實なり。言ひ換ふれば。一命を天よ任せて。心安く義を行ひ。以て今日を樂み以て。將來を望み。當然の分よ從ひて肯へて違いざる。人道の極意たるなり。おれを分つて三となす。曰く教理。曰く實行。曰く禮拜おれなり。教理とい。人の限りある智慧と。神の限りなき智慧との感應の發顯なり。實行とい。人の完からざる意志と神の全き意志との感應の發顯なり。禮拜とい。被造物が創造者にさゝぐる感謝と愛の發表なり。夫れ此等三のものなくして。人生い果して事欠かざるや。全世界を尋ねまわるもたゝ「否」といふ一答あ

るのみ。試よ世界の國々よ就て觀て見よ。信仰なく。道德なく。禮拜なきもの果してありや。宗教なきもの果してありや。決してあらざるべし成程こゝかしこよ。恐るべき。不信神を口よする個人――人類の怪物を發見すことあるべしと雖。其惡言ハ全地の面より祈となりて神の聖位よ立上る尊敬の聲に打消さるゝよあらずや。世界の記錄を繙きて。過よし數千年の昔よ溯り。地球のハしゝ。すみ〳〵までも手を廣げて。其大陸の奥深き所より。その小島の浦々よ到るまで。貧者の小屋より。王公貴人の玉殿よ到るまで索し求むるも。神の宮ろこにあらざるなく。神の祭壇ろこよあらざるなし。實よ宗教ハ人間社會安泰の礎にして凡そ地上。人間の住ひし所よハ。宗教の行ハれし跡あらざるハなし。然らハ之によりて吾人の悟るべき所ハ何んぞ。宗教ハ吾人の本心本性よ基して。此を安立完成しむるよ最大切なり。人ハ人らしく生存るゝ必ず宗教を要す。若しこれなくんバ。人ハ人らしく生存る能ハずとの義これなり。されば人の最も適れたる所。人の最も貴き所を知らんと欲せバ。彼の宗教よ對する如何を視るよ若くハなし。人の勢力の秘密ハ神より來る。もし彼が神より得るの勢力を除去らんか。其殘る所ハ幾許もなからん。アヽ人の勢力の秘密なるかな。人の眞勇の源ハ。只宗教よありと云ふも可なり。われ神を畏る。されど他よ何物をも恐れぎと云ハしむるものハ宗教よあらずや。之よ反して。宗教の大眞理を抱かざる人ハ。正義を土足よかけ。良心の權利を蔑如するものよ向つても。たゞ後ゝとさりして逃げ惑ふのみ。かるが故よアリストテル言へる語あり。「神を畏れざる靈魂ハ勇氣なき靈魂なり」と。夫れ何者をも恐るゝ人の勇氣なきが如く。何者をも畏れざる人も亦勇氣なし。そハ彼れ神明を畏るゝ事を知らざればなり。且又宗教ハ人生の大歸着を知らしむるものよて。其何處より來り。何處に去るやを知らしむるものなり。若し此大歸着を知らすんバ。人何を以て其思想。慾望。品

行を支配して。其威光を示すの寶冠を頂くを得んや。其安心立命を有ちて泰然たるを得んや。無宗教家の靈魂に。すべての希望消失すべし。ろい天より追出されたる無神論者い。同時ゑ地面の喜樂よりも追出されべなり。譬い根を切られたる葡萄蔓の如し。其切らるゝと共ゑ。花を咲し。果を結ぶの力をも斷絶るゝなり。かの鷹の前ゑ。小鳥の逸早くゑけ去るが如く。喜と望と。安きとい。則ち無宗教家の前よりゑげ去るなり。而して憂と。煩悶と。厭惡と。失望のみ。彼が前ゑ現出ん。近世の大說教家。アゴスチノー師曰く。「卿等もし懷疑(無宗教)の生涯を送らんとあらば。思ふがまゝゑ。送るを得べし。されど卿等が凡ての骨折。其生命すらも。電光の如く消失するものなるを思いもや。快樂のみを日々の目的とする者い。其快樂すらも奪らるべし。而して。彼が齡すでゑすゝみて。一歩毎ゑ墓場に近づくの際ゑ於ても。尙何んの安心をも有たざる狀を見よ。風前の麥殼の如く散りしい。かの快樂ゑあらもや。散りて殘りしもの果して何んぞ。唯空なるのみ。最愛したる者の死骸の傍ゑ立ち。堀開たる墓ゑ眼を注ぎつゝ。暗黑を望んで泣く者ぞ憫れなる。大ひなる煩悶をもて。彼は凡ての哲學ゑ問ひ。凡ての學術ゑ訴へ。天ゑ叫び地ゑ哭くも。彼を慰むるものい只「恐くい」との一語あるのみ。然るゑ何んたる事ぞ。世ゑ最期の際まで目を光ゑ閉て。嘗て末來を思いざるの態を裝ふものあり。されど彼他人を欺き得べきも。自ふを欺くこと能いもや。平穩なる表面の下ゑ。をぢ惑ふたる本心あるなり。又一方ゑ於てい落膽の餘り。自ら刀を取つて其生を絶ち。以て一片の石碑ゑ。よく己を永遠ゑ隱し得べしと思ふものあり。而して見よ。彼等が落付く先い等しく活ける神の掌中あるを。これ宗教を無する人の生涯の一斑のみ。されば無宗教ゑして世ゑ生活んこと。決して爲し得べきゑあらもや。而も尙これを試んとするの人い。大灘の眞中ゑ破船したる船子の如く。又大沙漠の中心ゑ道を失ひたる旅人の如き非運ゑ逢ふべき

のみ。この時彼等が「因縁因果」てふ偶像よ到つて助けを請いんとするも。彼蒼天高き所よ坐を搏へて。其無情なる顔付を動しだよせざるべし。而して其果い二途あるのみ。曰く獣類の如く生活んか。曰く自殺して果んかと。わか兄弟よ。世よ無神論者と自稱ふも。其實信神の必要を感せざるいなし。……八一刻と雖。宗教を無して世よあるよと能いず。たゝ其最切要を感ぜるい。死の苦の時なり。苦い凡ての空想を掃蕩ひ。凡ての迷妄を切り開き。以て吾人を人生の眞實よ復歸らしむれば。あり。左れど我兄弟よ。もしわれふの中よ宗教よ迷へる者あらば。其最期の際よて復歸るを待ざれ。そい死の來ること不意なれば。吾人をして。全然。憶斷妄念の縛より脱せしめよ。吾人をして世の紛々たる論説の絆を絶ち切らしめよ。さらば吾人自由の心、情もて。基督の輕き軛を採り。以て無上の平安を見出さん。ア、吾人が信仰の始なり。又終なる基督——道なり眞なり。生なる基督い吾人が永遠の安慰たるなり」と。

さて人間よ宗教の欠くべかふざること。以上陳べたるが如くなれば。我日本よ宗教の必要なる所以い、自ら明かなるべし。そい我日本い人間の住ふ日本よして。日本國い即ち人間國よ外ならざれいなり。而して余がこゝよ特筆して。眞價充てる宗教を要すと云ふものい。第一てれまで我日本よ於て。眞の價ある宗教なかりければなり。その無かりし次第い。既よ前章よ於て論じたる如くなれば。此處よ繰返すの必要なし。たゝ一言されを盡せば。從來の神。儒。佛教い。多く形式よ流れて一個の習慣となり了り。道德を云いざるよあらざるも。之を實行せしむるの動力よ乏しく。信仰いたゝ御利益を受くる爲めのみと思ひて。其御利益い實德よ伴ふものなるを知らず。且又經文を熟讀して之を玩味する者少なく。殆んど經文なきよ同じ。而して困襲の久しき。頑固。偏頗。無智。排外の氣自かふ之よ連着して。到底第二十世紀の文運よ一致

すべくもあらぬと云ふよりありたり。それ人類が眞價乏しき宗教を棄て。眞價ゆたかなる宗教を慕ひ求むるハ。譬へハ慈母の留守中ハ乳を慕ふ赤子の如し。泣て止まざるか故ゝ假ハ擬乳子を與ふる時ハ。其形の少しく相似たると。其情の最切なるより。直ハ吸付きて泣を止むといへども。暫くすれば。其眞乳房ハあらざるを發見して。又々泣き立つハ到るべし。そハ眞ならざる証據ハ。腹を滿すの乳汁を出さゞれなり。此時。又假りハ指を與へて含ませる時ハ。また直ちハ之ハしばぶり付くと雖。幾許もなくして其眞味なきを悟りて又々泣き立つべし。而して到底慈母の眞乳房。眞味あり。眞價充てる乳を飲せざる限り。彼ハ決して泣を止めざるべし。若し泣き止むことありとせば。おれ泣き勞れてしゞし假寢の夢を見るのみ。眼の再び醒め來らん時ハ。又必ず泣立べし。ア、難ひかな〳〵眞實ねうち乏しき宗教をもて。わか國民の宗教心を滿足せしめんとするや。今や我國民の多數ハ。泣き寢入りハ寢入りたるの姿なり。隨つて宗教ハ無頓着なるが如しと。雖これ從來の宗教ハ懲りたればなり。眞價乏しき宗教ハ惑ハされたれバなり。然りと雖。寢入りたる者ハ必ず醒ん。その醒め來るの時ハ。彼が之を要むるの情や。一層切なるのときなり。其狀態。なほ寢覺め子の乳を慕ふこと最も切なるが如し。請ふ目を擧て見よ。わか國民が眞乃宗教を求むるの期ハ。既ハ眼前ハ迫りたるハあらずや。夫れ日清の戰爭ハ。我日本の名譽を万國ハ轟したると同時ハ。又我責任の重且大なるをも自白したるものなり。其重且大なる責任とハ何んぞ。我日本ハ啻ハ武力ハ於て勇猛なるのみならず。文學に於ても。科學ハ於ても。工藝技術。美術。實業ハ於ても。拔群なり。啻ハ此等のものハ於て拔群なるのみならず。其心の中にある道德ハ於ても。亦最高潔。純白ハして。公大博愛平等。自由を旨とし。義氣壁固ハして。よく天道ハ合ふものなりとの事を。滿天下ハ揭げ示すべきまと則ちこれなり。然るハ戰ハ勝つたる後

の國民ハ。往々高慢の鼻を高くして。血氣の勇にいやりたゝ〳〵腕力の沙汰のみ盛んゝして。謹直の風地ゝ墮ち。かてゝ加へて。不時の金儲けをなしたる者もあれハ。軍夫。軍人の勝ゝ乘て歸へるもあり。金ハあり。人氣ハ善し。飲めよ。歌への大遊蕩ゝ耽りて。漸く一國の風俗を亂り。淫樂。不潔しきりゝ行ハれて。知らゞ國民の元氣を損じ。わか家業を忽にして終に貧苦の谷ゝ陷り。ハてハ一家の衰亡をも招くゝ到らんと。是れ隨分古來の史ゝ鑒みて例多き習なれハ。我國亦ろの覆轍を蹈まずとも期し難し。そも〳〵此時ゝ當つて。よく大聲疾呼して國民の道德を喚起し。個人の元氣を保持涵養いて。むさ〳〵惡俗。惡習ゝ感染しめず。たゝかい勝て國ゞす〳〵奮ふの實を全ふせしむるもの。豈宗教の力ゝあらゞして他あらんや。神を敬ひ。人を愛する。所謂。敬神。愛人の大義を守らしむるの。宗教にあらずして他あふんや。宙ゝおれのみならず。今の今現在の足下より。たえず國民を警醒めて。彼等に天道人事の要を知らしめ。一旦變あるゝ當つて。動せゞ。惑ハゞ。綽然として餘裕あらしむるの必要ハ。既ゝ前陳たるが如し。これ余が我日本ゝ眞價充實る宗教を要すといふ所以の大畧なり。

問 我國民は。よく大宗教を嚼味同化ゞるの力ありとハ如何。

答 基督教ハ大宗教なり既に世界の隨處に行はれて。これに眞價充てるの次第は。略前節にのべたるが如し。而して我國民は。其固有の能力に於て。善く之を取て。我有となすに堪ふをいふ。

見るべし。わが國民が。他を學んで却つて其妙處を得るゝ敏きの伎倆に富めることを。此ハ藝能。器械の業ゝ於て見るべきのみならず。殊に宗教。道德の点ゝ於て著しとなす。佛教ゝハ弘法大師。親鸞上人。其他の

名僧知識起りて之を弘通し。縱し明治の人間を感化するゝ足らずとするも。古昔ゝあつては頗る其功德を普ふせり。儒敎ゝ於ても。藤原惺窩。林羅山。伊藤東涯。中江藤樹等の碩學鴻儒輩出して。其德化見るべきものあり。思ふゝ此等の人々ゝ。所謂國民の精粹なるものゝして。我日本を代表すと謂つべし。若し彼等をして今日の盛世ゝ逢ふわらしめば。其爲す處必らず驚くべきものあらん。古すでゝ然り今の世豈古ゝ若かざるの理あらんや。夫れ猫ゝ小判を與ふるも詮方なし。豚ゝ眞珠を投ぐるも。只蹂躪らんのみ。たとひ基督敎如何ゝ價値ありと雖も我國民ゝして之を身ゝ占め味ひて。以て我有となすの能力なからん時ゝ。ゝ。ゝれ猫ゝ小判の類にして。論ずるゝも足らざ。然るゝ大ひなるかな我國民。彼等ゝ確かゝ其能力ゝ富めり。此は古來の實際に照して明白なり。嗚呼、基督敎にして果して眞價あり。我國民ゝして果して之を喰ふの能力あり。又其必要ありとせば。斯敎の我國ゝ行ゝるべき。豈疑ふゝ足らんや。

且又世界的の文明ゝ。滔々として潮の如く壓し進み。これに背くものゝ亡び。これに從ふものゝ榮ふの實跡を示し。物質上の實利と共ゝ。精神上の正義。博愛。自由。平等。和親。交通。四海兄弟。五洲同胞の主義も。若々として歩を進め。これを拒まんとして得べからざるの勢を呈せり。かの支那の大國ゝして。何故此小日本國ゝ負くるかなら。日本ゝ文明の主義ゝ從ひ。支那ゝ則ちこれゝ逆ひ。日本ゝ正義。博愛。自由。平等の精神ゝ從ふに。支那ゝ則ちこれゝ逆へゝなり。夫れ正義。博愛。自由。平等。和親。交通。四海兄弟。五洲同胞の主義ゝ。これ取も直さず基督敎の本旨にして。則ち其精神。骨髓なり。成程一方より。見る時ゝ。基督敎國にして。相爭ひ。動もすれば戰ゝも訴へんとするの狀ありと。雖。これ進歩の途中ゝある止むを得ざるの附加物ゝして。鋭く其中心ゝ入て察する時ゝ。平穩なる進歩の金線。則ち神明の正しき御旨ゝ天地一貫の勢を以て

成就しつゝあるなり。之を譬ゝ藪中の筍の如し。かの國と國との嫉み。爭ひ戰等ゝ筍の皮なり。皮ゝ筍の長ると共ゝ。或ゝ下ゝ落ち。或ゝ横ゝ散るべし。されど筍ゝ相變らず成長す。而して其皮の下ゝ落つるゝ。たゞ〳〵以て其筍の成育証據として觀察るべきが如く。今の文明世界ゝ。嫉み爭ひ。戰などのあるゝ。一見神の御旨ゝ背くが如しと雖ども。深く其眞底を察して。正義。博愛等の主義の貫くを看取する時ゝ。却つて是れ筍の皮を落して其成長を全ふすると一般の理なるを發見すべし。然らゝ世界的の文明の進歩。神の御旨。基督敎の精神ゝ。いよ〳〵出ていよ〳〵其光とあらゝすものゝ。我日本ゝ。今やひとしほ早く此德澤ゝ霑ふの東紅ゝ達したり。蓋し此日清の戰爭ゝ。我日本を進めて。世界の文明國ゝ仲間入りせしめたりとゝ。萬人の公言する所。亦それゝ相違もおきことなれば。これ取も直さず基督敎の精神我國ゝ入り。我國亦喜んで之を受くるの勢ゝ迫れるものと謂つべし。否我國ゝ既ゝ之を採用して。着々〳〵支那と戰ひつゝありと謂つべし。世ゝ基督敎を以て。一種秩香臭き御宗旨なりと思ふものゝ間違ひなり。基督敎ゝ世界文明の精神。人間進歩の要道。正義。博愛。自由。平等。信仰。贖罪。聖靈。愛の化身。活ける神の大道なり。凡そ人間として。又國民として。必ず信仰せざるべからざるの道。眞ゝ節義あり。貞操あり。艱難ゝあつて恐れず。安樂に處して亂れず。望を永遠にをきて。人生を樂み。其幸福を全ふせんとする者の必ず信ぜざるべからざる道なり。此道。此基督敎が。我日本の宗敎となるべきこと。豈最望ましき限りゝあらずや。余ゝ讀者と共ゝ。一日も早く此日の近づかんことを望んで止まざるなり。

宗敎は蒼空の如し。之を觀察ることゝ〳〵よ〳〵久ふして。その星辰を發見すこといよ〳〵多々なり。又蒼海の如

し。これを眺望ることいよ〳〵廣ふして。其際涯のんよ〳〵濶大なるを認む。而して又純金の如し。これを爐に燒くこといよ〳〵頻繁にして。其光輝を放つこといよ〳〵燦然なり。

第三章

基督教を信ずるの理由　上

問　基督教を信ぜるは。何の爲なりや。

答　人たるの道を全ふせんが爲めなり。

世の中ゑ人の數おほしと雖ども。眞ゑ人の道を全ふするもの果して幾人かある。智識才能ある者ハ。その智識才能ゑ誇りて身の程を忘れ。無智文盲なる者は。又うの無智文盲に塞されて惑ひ多し。富者ハ金の爲めゑ心くらみ。貧乏人ハ貧の爲めゑ耻を知ふず。斯くて人間世界ハ慾の世界となりて。互ひゑ惡み。互ひゑ恨み。動もすれば相爭ひ。相訴へ。金錢ゑ親子ハなしとて。慾の爲めゑは。親子すらも奪合ふに到る。況んや他人に於てをや。損得ゑかゝハり無き間ハ。やゝ笑を含むで世辭を並べ。禮儀と裝ひて。いかさま殊勝らしく見ると雖ども。一旦損得の話

と及ぶ時い。忽ち眼と角立て。聲と力を入れて躍起となり。一つ間違へば打も据んも權幕となる。誠と淺ましき事の極みなれども。何如とせん滔々たる世間。見渡す限り殆んどこれなり。其他酒と醉ふて人を害ひ女と迷ふて身を持崩し。權威名聞と高ぶりて他を凌ぎ。榮耀榮華に耽りて獨たのしみ。眼前の私とまなこ暗みて遠き公とをもんばかり無し。皆是れ人として人たるの道を全ふせざる者とて。明治維新の後人智の進むと共とます〳〵此わる智慧も增長し。質撲の田舍にまでもをい〳〵此風浸み渡り。儒道。佛道。神道。の力とても。なか〳〵支へ難く。いよ〳〵出て。いよ〳〵人道の頽廢らんとする傾を呈せり。アヽ是れ如何んせば即ち可なるや。余以爲へらく。正と基督敎と依りて以て此すたらんとする人道を救いざる可からず。今や其氣運到來の時節なりと。

問 基督敎を信ぜずとも人たるの道を全ふするに不足きにあらずや。

答 いな〳〵然らず大ひに不足あり。

或人思へらく。基督敎い西洋の敎なり。西洋ゐ於てこそ用はあれ。我日本國と於ていい嘗て其用なし。日本とい自ら日本在來の敎あり。何んぞ外國の敎を用ふるを要せんやと。成程一應い尤と聞ゆと雖ども。よく〳〵考ふる時い。はなはだ狹苦しき了見たるを發見すべし。夫れ遠く智識を世界と求め。廣く好誼を万國と通じ。彼の優れたる所い。惜みなく採て以て我及バざる所を足し。我の長じたる所い。又惜みなく彼と與へて以て其短を補いせ。心を推開きて。彼我相益するの法を取るこそ。文明の道ゐあらずや。然るとも何んぞ彼我の隔を立て。基督敎の是非をも確めずして。浸りに西洋の敎たりてふ一事を以て之を斥けんとするが如き井の底の蛙にも耻すべき心と謂つべし。若し西洋の敎たる一事を以て斥くべしとならば。かの氣車。氣船。電話。電信。電燈等もろ

〈有益のものをも。亦皆すてざる可からず。そゝ此等もみな西洋より敎へられたるものなれバなり。回顧よ。日本よりも古より帆船あり。鶴あり。行燈あり。燭臺ありて。隨分日用乃便利を足したるよあらずや。然れども。之を今日の滊車。滊船。電話。電燈等よ比ぶれバ。その便。不便ハハたして如何。凡て物の不足ハ比較より起るものよて。比較せざる時ハ。不足なしと思ふ事も。これを他に比較して後に始めて大ひよ其不足あるを感ずるよ到る。譬へバ田舍の識者が東京よいでゝ。初めて身の無學なるを知るが如し。今夫れ基督敎を信せずとも。人の道を全ふするよ不足なしと思ふハ。おれ日本在來の敎のみを聞て。未だ基督敎を知らず。之と比較せざるが故なり。比較せよ。基督敎ハ晝の日輪の如く。在來の敎は夜の月輪の如し。月輪も夜の間ハ實に貴しされとも夜明けて後。日輪光々として東天よ上るよ及んでハ。最早その御影も甚薄し。夫れ基督敎の日輪ハ正よ東天よ上りて全世界を照すよあらずや焉んぞ何日までか眼を閉て。曩昔の月を夢ることをなす。且又こゝよ注意すべきハ。基督敎とて强ち日本在來の敎に。いち〳〵正反對をなすものよあらずとの事なり。基督曰く。「われ律法と預言者を廢るためよ來れりと思ふ勿れ。われ來りて之を廢るよあらず成就せん爲めなり」と。こゝよ律法と預言者とあるハ。恰も日本在來の敎よも通るものよて。基督の目的ハ古來聖賢の敎を廢るためにあらずして。却て其不足をたらはして。其實効を成就せしめんとよあり。豈公大不偏の敎旨よあらずや。

問 其不足とは何ぞや。

答 天道を知らざるにあり。

人の道を全ふせんと欲せバ。天の道を知らざる可からず。天の道を知らずして人の道を全ふせんとするハ。猶天を戴かずして。地を歩まんとするが如し。理よ於てある可からざるなり。今近く例をひきて說を

なさんに米は田より産出るものなり。田を耕し。田にこやし。田に苗植て而して其收穫を待てば可なり。耕作の道全くこれより盡せり。何んぞ他より掛念すべきものあらんやと云ふ者あらば。是れ未だ耕作の道を全ふせざる者なり。如何んとなれば。凡そ耕作を全ふせんと欲せば。天の時を知らざるべからず。又天よりの日光雨露の養ひをも受けざる可らざれば也。若も天の時をかまはずして。時候をくれより植付をなし。若くは旱魃よりして雨露の養ひなきか霖雨ふりつゞきて。土用炎天の暑氣なき時には如何より田に肥し。如何より田植て。其收穫を望むとも。決して其甲斐あるべからず。耕耘。肥料。植付の骨折は全くの無駄事となりて。悔むも詮なき樣とならん。夫れ天の時。雨露日光の養ひは。猶天道の如く。耕耘。肥料。植付の勞れ。猶人道の如し。もし耕作の法を知ると謂つて雨露の養ひを知らざる者は是れ未だ耕作の道を知らざる者は。これ到底その人道般人道を知ると云つて未だ天道を知らざる者は。これ到底その人道

を全ふする能はざるものなり。試みより實際より照し見よ。人目の關を忍び。法律の網をさへ甘く潛れば。恐るべきもの天下になし。正直れ馬鹿の異名なり。詐僞れ世渡る方便なり。兎角うき世は強が勝なりなど。得々として言ひ放ち。肯へて恥ずべしとも感ぜざるは皆是れ天道を恐れざる者よあらずや。而して世間十中の八九れ。大抵これなり。否。聖書より義人なし一人もなしとあるれ。一般の人情を喝破せる名言にして。却ひてめい〳〵我心をたゞす時れ。思ひ半よすぐるものあらんか。天道の傳へざる可からざる今日より甚だしきはなし。

問　天道とは何ぞや。

答　天と人との間に通ずる感應和合の大路なり。

感應とい叩けば響く聲の如し。妻夫を慕ふと厚ければ。夫妻を愛すると濃なり。子親を思ふと深れければ。親子を思ふこと切なり。皆是れ感ずるとあれば必ず應ずるものにして。此理天地より質してたがふことなし。

基督曰く。求めよ。さらば與へられ。尋ねよ。さらば逢ひ。門を叩けよ。されば開かるゝことを得ん。そは凡て求むるものゝ得。尋る者ゝ逢ひ。門を叩くものは開かるべければなりと。和合とは隔の籬を毀ちて。親疎相睦むが如し。一物を互ひの間に止めずして融々和樂し。一致合体して。よく其曲れるを直し。屈めるを伸し。天上天下。一氣貫通して秋毫も沮むところ無きを云ふ。夫れ天と人との間にゝ此感應和合の路存して。坦々塗の如し。而も其眞義深ふして。凡人の智慧もて測り難し。天幸ひに基督を下し。以て此奥義を示し玉へり(委しきは後に明らかなる可し)

問　天とは何ぞや。

答　神明なり。

左傳に。神ゝ總明正直にして一なるものなりと。又聖書に我儕に於ていは惟一の神。即ち父あるのみ。万物これより生り。我儕これに歸すとあり左れば天地の間に極めて耳疾く。目早きものありて。時をも分ず。所去りせず。在りの儘に現在して。端的に往來し。あらゆるものゝ体となりて此兩間(天地)にみちわたり。在れども元より形もなく。聲もなければ人の見聞に及び難し。而も仁愛の德かぎり無ふして。これに對すべきものなく。所謂絶對にして惟一無二なり。これを名づけて神明となす。

或ゝ問はむ眼にも見えず。手にも觸れざるものを如何でありと知らんや。目に見え。手に觸るればこそ。即ち山あり。川あり。草木あり。人間ありと知らるゝにあらずや。もし然らずんば。決して此等のものを知ることを能はず。此理を推せば。見聞にも。觸れざる神を。如何でありと知らんやと。答へて曰く。こは怪しからぬことを聞くものかな。夫れ眼にも見えず。手にも觸れずして。而も確かにあるものの世にこれあり。空氣これなり。人心これなり。空氣ゝ眼にも見えず。手にも觸れずと雖ども。確かに之あるゝ何人も疑ふこと能はざるべし。人の心も目に見ることを得ず。手に觸ることを得ずと雖ども。喜しければ笑い悲なしければ涙を催ふ

すもの。是れ其實在の證據なり。されバ眼よみえず。手よ觸れずとの一点を以て直ち神無しと云ふの理立たざるを知可るべし。神ハ五官よふれずと雖ども。歴々として確かに在ますものなり。或は又問ふて云はむ。日本よりも昔より神を尊んで神國と云はるゝ程なり。此日本の神と基督敎の神とハ如何なる相違ありやと。答へて曰く。日本人の神と云ひなす神ハ。其數多くして八百万神とも云ふ多くハ國家よ功勞ありし人を崇めて神と祭りたるものなり。譬へは八幡宮とは應神天皇を。湊川神社とは楠正成を祭りたるの類。推して知るべし。たゞ古きと新らしきとの別あるのみ。よて古くより神と祭られ玉ふ。は一層有難く。あたらしきは何となく其有難味少なきが如しと雖ども。其實ハ一つ理なり。其他狐。狸。白蛇なゞを神として崇むるが如きは。皆無智の情より來るものよして。論ずるにも足らぬことなり。之をものに譬へば。一天万乘の君が卑人乞食に手を合せて願事をなすが如し。人間は万物の長なるよあらずや。然るに卑しき蓄類に頭を下て。其憫みを乞ふなどゝハ實よ言語同斷の疑戯と謂つべし。基督敎の神は。右述ぶるが如き神々。即ち人よりせられたる神よあらずして。神ながらの神なり。又日本の神々ハ日本丈けよ通用する神々よして。日本外よハ通用せず。外國人に楠正成を神と信じて禮拜せよと云ふとも。決してせざるべけれども。基督敎の神ハ世界万國何れの處にも通ずる神なり。凡そ人間たるもの。曉かれ。早かれ。必ず認めて以て信仰せざる可からざるの神明なり。これを名づけて天といひ。又天父とも云ふ。

問 神の果して在りといふ證據如何。

答 其證據ハ多し。

まづ(第一)わが心に尋ね見よ。神ハ無きものなりと謂て滿足が出來るや。我子か。親が大病よ掛りて。もはや醫藥も其効なく。醫者も大抵さじを投げ。如何よしても人力にハ及び難しといふの場。名。神の助けもが

なと思ふの一念は起らざるや。又わが身よ不幸不運打ち續きて爲す程のとい悉く失敗り。人よ謀るも固より詮なく。父兄骨肉も如何ともなす能はざる場合よ當りて。神の助けもがなと云ふの熱情い生せざるや。飢饉疫病ところ〳〵よ起り。天災地變えきりに到り。みす〳〵無慘の最期を遂げんとする際。神の守護もがなと思ふの熱情は生せざるやとかす、ぺーんとて名高き無神論者が。或時太西洋渡航中。難風よ出逢ひて大ひに恐れ。われ知らず神に祈れりといふ話あり。既よ人口よ膾炙せるが。これ人情の自然と謂つべし。口よ出して言ふと。心底に止ひとの相違てそあれ。必ず此情起るものなり。左ればよや世界中。何れの處よ到るも。野蠻と文明との區別なく。みなそれ〳〵神を求めて拜せざるなく。野蠻人は野蠻たげに。或は蓄類を神とし。日。月。星。火などを神とし拜し。文明人は文明たけよ上品なる神を拜するの相違てそあれ。神を崇めて其助けを祈るの情はみな同じ。そも此世界一般よ行い

るゝ信神の事實と。又その心底に存する信神の一念とい。全く以て迷ひなりとなすと。おれにい一つの眞理ありとなすと。孰れが理なるや。もし斯る事實をしも迷ひなりとすべくんば。天下何物をか迷ならざらん。故に余い信ず。此は決して迷ひにあらず。至情止むを得ざるより發する誠なり。否これを以て眞の神明の在ます可からざる證據となすに足ると。其理譬へば。人体よ空氣を要むる肺臓の備へあるを見て。体外よ空氣のありと信ずるが如し。之を適合の法といふ。男あるよりして。必ず女あるべしと信ずると一般なり。故よ人心の至情よ同しく神を求むるの誠あるゝ。これ正しく實際に神ゐますの證據なりといふも。決して無理なる事よいあらざるべし。(第二)人は正義をよひ可き者として世よ存するゝ。本心の示す所よても明かなり。少しよても正義よ外れたる事をなさんとせば。必ず本心の咎めあり。これよ反して。正義よ合ふとをなさんとせば。必ず本心の喜びあり。且又正義を

行はざれば人間の社會立ちゆかざるの仕組ありて。一日たりとも人間悉く本心を失ひ。仕放題を仕出かして顧ざらんか。世ハ忽ち土崩瓦解すべし。そも此の如き仕組に世を取定めしは何人ぞや。これ何人よもあらず。天の定めなり。此定めや。實よ意味深く。智慧滿ちたるものにして。此意味と智慧とハ何處より來りしぞ。智慧ハ智慧あるものより來る。智慧の無智慧より來らざるハ。瓜の蔓に茄子の生らざるが如し。故よもし智慧の定めが忽として皆無より出で來しと云へば。人間ハ木の股より生れたりといふも不可なからん。天下豈此理あらんや。即ち此智慧の大元ハ神明なり。神明ハ正義の根本なり。神明なければ正義の道立つ事なし。故に又神明ハ道德の極意なり。神明なかつせば。道德の堅く立つこと覺束なし。恰も砂の上に建てたる家の如く。雨降り大水出で。風吹きて其家を揺ば。終にハ倒れて其傾覆大いなり。今より百餘年前。佛國よ。大亂おこりて。國中蜘蛛の網の如く擾れ。天子を殺し。朝廷を覆へし。亂暴狼藉いたらざる無き事ありき。而してこれ全く同國民が神ハ無きものなり。理屈の外に神なしと言ひ罵りし時なりき。されば神なければ正義行はれず。道德立ず。國家の大平得て望むべからざるハ明かなりと。謂つべし故よ曰く。道の本元天よ出て更ふべからずと。(第三)つら〳〵此天地間の万象を何くれとなく察するよ。一として整々たる秩序あらざるはなし。春來れば夏。夏去れば秋。秋より冬と四時あやまたずして。千歲一日の如く。五穀成就し。民人化育し。小は魚介昆虫の小より。大ハ三千大千世界の大よ到るまで。あまさず。もらさず。悉く一貫の下よ連なり。汪々滔々として。其際涯を知ることなし。これ豈造化の大法にあらずや。夫れ法ハ猶法律の如し。法律ハ必ず之を定むるものなかるべからず。日本の法律ハ天皇陛下これを定む。今もし天地の法律ハ誰か定めたるものなりや。固より人間の定めたるにあらざるハ云ふまでもなし。即ち神明なり故よ天地歴然の法律ハ

以て神明の在すを證するに足る。

さて右陳べたる三ヶ條は神の證據を盡せるものにあらず。たゞ僅かに其大要をあげつらへるのみ。誠にこれより以上神明在すとの極意まで達せんと欲せば。信仰によるの外あるべからず。信仰は靈の眼なり。此眼あらば。以て直に神を心に拜するを得べし。譬へば清くすめる水に。そのまゝ月のうつりて互に光を磨するが如し。久しくすれば一つ誠に渾融して神と人とを分ず。恰も水や空。空や水。一つに通ひて相澄むに到らん。まゝに到りては。洋々乎として其上にゐますが如く。其左右にゐますが如くなるべし。かるが故にたゞ〳〵道理一偏によりて神明の事を究めんとするのみ。馳走の講釋を聞て其甘味を知らんとするが如し講釋いかに詳しと雖ども。それのみにては眞味を解し難し。寧ろ一椀を喫して味占むるに若ず。さすれば言外の妙味釋然として自ら解ん。希くは讀者。もし我意我慢の角を折つて。生れのまゝの赤子となり。其赤子心をもて神明を信せよ。神明ゐますとの證據手に採るが如きものあらん。基督曰く。誠に汝等に告ん。もし改まりて赤子の如くならずば天國に入ることを得じと。天國とは神の眞味に入ることなり。

第四章　基督教を信ずるの理由　下

問　神は唯一なりと云ふは如何。

答　最上至極のものは唯一なるの理と同じ。

比喩ば日本帝國にて最上至極の權威を保全たまふ者は天皇陛下なり。故にたゞ御一人ゝて在位が如し。國ゝ二人の天子ある時ゝ其國必ず乱る理のゆるさゞる所なればなり。今夫れ天地萬有を統治たまふ最上至極の實在者ゝ神なり。人間と云はず畜類と云はず一切の事物ゝ皆此神ゝ屬す。神の上に神なく神の他ゝ神なし。若しこゝゝ神ありて其上に更ゝ大ひなる神ありと云へば其更に大ひなる神こそ余が所謂神なれ。もし其更ゝ大ひなる神の上ゝ尙更ゝ大ひなる神ありと云へば其尙更ゝ大ひなる神こそ余が所謂神なれ。故ゝ到底たゞ一なるの外ある可からず。聖書ゝ曰く汝の神ゐはは神の神主の主なりと。又曰く神と稱ふるもの或ゝ天ゝあり或ゝ地ゝありて多くの神多くの主あるが如しと雖ども我儕ゝ於てゝ唯一の神即ち父ゝあるのみとされば余が所謂神ゝ至靈至誠ゝして天地の太極宇宙の最上ゝまします神なり。豈二あるべけんや。

問　神は人の拜すべきものなりや。

答　然り固より拜せざる可からず。

我國に於てゝ此唯一神を拜するもの甚少なし。多くゝ拜金宗の人ゝて金を何物よりも大切視して。これゝ禮拜し。つかふるなり。然りと雖ども山の如く金銀を積み上ぐとも。肝心の生命なくてゝ何の益ゝも立ず。某處ゝ餓死の屍ありければ其懷中をあらためしゝ多分の金を所持せしとぞ。此等ゝ隨分愚なる話なりと雖ども蓋し世に珍らしからぬ事なりとす。夫れ神ゝ生命の大元なり。神を信ずるとゝ其生命の

大元に歸ることなり。神を拜するとゝ。其生命の源頭に浸潤ることなり。豈これを忽にすべけんや。讀者或ゝ云はむ。われらは我生命を肉身の親より受けたり。長じて親の手を離るゝや。我等は。我手に稼ぎて。我手に食を備へ。我手に食ひて此生命を維持り。何んぞ神の御世話にならんやと。これ實に無分別の甚しきものと謂つべし。成程。わが生命ゝ。わが肉身の親より受けたるに相違なきが如しと雖ども。而かも親の一了見にて子の出生るものにあらず。若し親の了見のみにて子の出生るものならば。世に子なくして悲む親はあらざるべし。幾百万圓の身代を擁へながら之を讓るべき子なしとて。怨みかこつの族あるゝ何んぞや。よし又。親の了見のみにて出生るとするも。其親の親ゝ如何。尚其親の親の親ゝ如何と。次第々々に推し尋ね行けば。到底最後の極點即ち人間最初の第一人に達せざるを得ず。而して其第一人ゝこれ到底親なくして出生せしものたらざるを得ず。或ゝ進化論によりて。最初の人間ゝ畜類より變じたりといふも。其畜類の由來如何と。また其奥より奥へと尋ね行けば。結局天地万有の大元。唯一の眞神に達せざるを得ず。實に神ゝわれらの大元にして。則ち我肉身の親の親なり。われら如何で此親なる神を拜せずして。人間の道立つと謂ふべけんや。肉身の親にすら不孝なれば。親不孝と謂つて其罪輕からず。況んや親の親たる生命の大元に對して不孝なるをや。又かの食物にしても。我手に稼ぎ。我手に食ふと云ふと雖ども。第一この生命に最大切なる。水。空氣。日光等ゝ誰が手造せしものなるや。誰れもあらざる可し。これ實に天の惠なり。神の恩賜なり。其他日常の野菜。穀物。肉類等の如きも。細かに考ふる時ゝ皆天の助けによりて生るもの。何一物として人力のみにて出來たるものはあらず。されば此慈愛ふかき神に對して。如何で禮拜の誠をいたさずして可ならんや。故に基督曰く。汝心を盡し。精神を盡し。意を盡して主たる汝の神を愛すべし。これ第一にして大

ひなる誡なりと。

或人難ずして曰く神を大切に拜すべきの其意を得たり。されど肉身の親を粗末にすべしとの理の在べからず。然るに基督教にては。只神々と謂つて。わが肉身の親を不孝になすと云ふの如何。

答へて曰く。これ決してあるまじき事なり。親不孝にして。如何で神に熱信なるを得んや。神その十誡の第五に宣へく。汝の父と母とを敬へと。基督も亦嘗て敬神を名として。其父母を輕んずる信心家を誡められたり。曰くそれ神誡めて汝の父母を敬へ。又父母を罵るものの殺さるべしと宣給へり。然るに汝等の曰て。凡て人父母に對ひ。汝を養ふべきものの禮物(神への)なりと云へば。その父母を敬はずとも可とす。斯て汝等の遺傳により。神の誡を廢くせり。僞善者よ。いざや(昔の信神家)の よく汝等に就て預言し。此民の口にて我に近づき。唇にて我を敬へども。其心の我に遠かり。人の誡を教となして。徒らに我を拜すと云へりと。(馬太傳。十五章。四―九)これよりて之を見れば。父母を敬へとの神の誡なり。故に父母に不敬なるの神の誡に背くことなり。父母に不敬にして禮物を神にさゝぐとも。神決して之を受け玉はず。所謂口と唇にて神を拜し。其心にて拜せざる僞善者なれば。徒らに我を拜すとありて。斯る信心の全く無益なるを明白に教へ玉へり。もし基督教を信ずと言つて。此明白なる誡を破るものあらば。これ取も直さず。基督教を破るものにて。名の何たるに關らず。決して神を信ずる者にあらざるなり。保羅(基督の弟)子曰く。子なる者よ。汝等主にありて(基督を信じながら)兩親に孝たがふべし。これ合宜ことなればなり。汝の父母を敬ふべし。約束を加へたる誡は。之を首とす。これ汝が福を得また地の上に壽長からん爲なりと。(以弗所書六章。一―三)其他孝行に關する教訓いと多し。されば基督教を信ずるによりて。肉親を敬はざるに到るなどゝは。實に跡方もなき誣言にして。探るに足らざる話

なり。以上は只基督教の教示る教義を擧たるのみなるが。今少しくこれを普通の道理より論せんに。元來基督教なるものは。心の罪惡を根治して。之を全きものとなし。至聖。至善なる神の前に立つとも。決して恥る處なきに到らしむるを目的とするものなれば。固より不孝不義てふ如き大罪をゆるすべくもあらず。たとへば白晝の中に暗夜の混入可からざるが如し。故よ熱心なる基督信者の中にゝ必ず熱心なる孝心の者あり。忠臣ゝ孝子の門に於てすと云ふ如く。孝子ゝ熱心の信者の中にあるべし。これ實地よ照して最も明白なる事實なりとす。もし基督信者と言ひながら。親不孝の行ひあるものあらば。これ決して信者よあらず。其信仰ゝとくよ惡靡よ奪ひ去られて。墮落したる僞信者なり。これをよく〳〵辨へざるべからず。

或は再び難ドて云はむ。聖書の中よ（馬太傳。十章。三四ー三七）夫れ我（基督を指す）來るゝ人を其父よ背かせ。女を其母よ背かせ……んが爲めなり。我よりも父母を愛む者ゝ。我よ協はざるものなりとあるゝこれ親不孝を敎ゆるものよあらずして何んぞやと。

答へて曰く。これ決して親不孝を敎へたるものにあらず。敎を守ることと堅忍不拔なるべきを敎へたるものなり。書を讀むにゝ前後の關係を知ざるべからず。之を知る時ゝ此聖語の明白なる意味を解するに難からざらん。夫れ人間世界ゝ何時も太平無事なるものよあらず。時としてゝ非常無道の場合起ることあり。假令ば。親として子に正義をなせ。善道を踏めよと命ずるは通常よしてこれ太平無事の時なりと雖ども。もし其親よして。不幸にも貧苦に迫り。子よ命じて盜をせよと强ることありとせよ。これ非常無道の時なり。此る非常の時に當りていたとへ親の命なりとも從ふべきにあらず。斷じて之よ反對し。飽くまで正義を取つて守らざるべからず。これ大義親を滅すといふものにて。天地の大義公道を破るに到りて

ん。最早肉縁の情にひかるべきよあらず。こゝ何人と雖ども其理を疑ふ能はざるべし。さきの聖語は即ち此る場合を指せるものなり。其理如何となれば。若し親の命なれバと謂つて。天地の正道を犯して盗を為さバ。結局己れ一身よ大罪を負ふのみならず。己が親よも。更に一層重大なる罪を負しむるの非運となり。孝せんと欲して。却つて大不孝に陥よ到れバなり。是豈子たる者の忍べき事ならんや。之に反して。よし親の命なりとも。不義非道ゝなす能ゝずとて。一時の不孝を忍びて断乎たれバ。啻よ己れ一身を罪より救ふのみならず。其親をしも不義の大悪より救ひ結局永遠の大孝行となる。されば非常の場合よゝ止むべからざるのよとなりとす。それ基督が我よりも父母を愛ひものは我よ協はざるものなりと宣ひしは。其父母不幸よも不義非道を勤むる場合よ於て大義公道を主旨とする我教を堅く守り決して一時の情よひかるべからず。もし左る事あらバ決して我必に協ふものよあらず。それ己一身を滅するのみあらず併せて其親をも滅せバなりとの仰なり。何んぞ不孝を人の子よ教ゆと云はんや。非常の場合よ處するゝ非常の覺悟なかるべからず。其覺悟をこゝよ示されたるのみ。基督教の本意ゝ。徹頭徹尾孝親を勤む。信神は決して孝道よ背くものよあらず。此理よく〳〵得心せらるべし

問　神を拜するの道如何。

答　聖書に曰く。神は靈なれば拜するものも靈と眞を以て拜すべしと。

靈と眞を以て拜するとゝ。虚偽虚偽なき眞心をもて禮拜すとの意なり。それ虚飾をもて神を拜するゝ猶眼を蔽ふて物を見んとし。耳を塞へて聲を聞んとするが如し。決して其甲斐ある可からず。然るよ目下世間よ行ゝるる信心の様を觀るに。多くゝ外面のみよ走りて。内心を顧みず。口よ念佛を唱へながら。手よ人の物を掠め。社前よ立ちて拍手

合掌いと殊勝なれども。歸路よ喧嘩口論いてい命のとりやりよも及ぶい。言語同斷なり。譬へば。底なき袋よ物を入るゝが如し。一方よりセッセと信心をつめこめば。一方よりセッセと信心は漏れ去るなり。又かの御祭禮と稱ふるものゝ如き。徒らよさやう〳〵しく騷ぎ廻り て風俗を乱し。酒よ醉ふを以て第一の樂とするなど。これ神を祭るよあらぜして。わが口腹を祭ると云ふものなり。されば管公の歌よも心 たに誠の道よかなひなば祈らずとても神やまもらん」とあり。以て心 の中よ誠もなくして。だゝ外形のみの信心の益なきを示されたり。且 又基督よも。當時信心の道をとろへたるを嘆せ玉ひて。噫、汝等禍なる かな。僞善なる學者とパリサイの人よ汝等い白く塗りたる墓に似たり。外い美はしく見れども。内は骸骨とさま〳〵の汚穢にて充つ。此の如く汝等も亦外い義く人よ見れども。内い僞善と不法にて充つと仰せ玉へり。誠に唯今の我國情よ適切なる金誠と謂つべし。神は靈なれ

ば其前に立ちては。一物も隱るべきなし。人間い丸で赤裸の儘よて。心の隅々までも。見すかされをるなり。然るに外よ美服をかざりて。其内を蔽いんとするが如き。所謂頭かくして尾かくさず。耳を壓へて鈴を盗むの類。たいけと云ふも愚なり。故よ神を拜するの道。たゝ淨清無垢の眞心にあり。

問　眞心さへあらば。別に神を拜せずともよきにあらずや。

答　否な拜せざる可からず。其眞心は神を拜するによりて初めて立てばなり。

世に管公の歌を生かしして心だに誠の道にかないなば。神信心い無用なりと唱へて。基督教を蔑視する族ありと雖ども。これ大ひなる僻事あり。なる程。心だよ誠の道よ合ふならば。これに優るの善いなしと雖も。其心が誠の道よ合ふと云ふあと。なか〳〵神の助よらざ

れば なし難し。口先のみの誠ならば。いとやすけれども。實地心の奥底より誠道に合ふと云ふことゝいなか〳〵容易なるものにあらず。彼のたやすげに。心だに誠の道に合ひなば。神信心は無用なりなど申すが。乃も〳〵心に誠なき証據なり。むかし孔子の如き聖人すらも道の修らざる。學の講せざる。これ我憂なりと仰せられたり。況んや凡人のわれ〳〵に於てをや。これが誠の道ぞやとの事すらも。我意盛なるわれ〳〵には分り難し。況んやおれを一々守るに於てをや。故にわれらの神を拜するゝ。先づ第一に其光明によりて。己の我心を照破され。以て誠道の何たるを知めされ。之を知さると共に。これを守るの力をも授らんとて。則ち神を拜するなり。加之人の神を拜するゝ。水の卑きにつくが如く。火焔の上に飛ぶが如く。自然の性なり。故によし心に誠道を守り得るとするも。尚神をば拜せざるべからざるなり。

問 神を拜するによりて。眞心の立つ理由如何。

答 聖書に曰く凡てわれら帽子なくして鏡に照すが如く。主(神)の榮を見。榮に榮いや増りて。其同じ像に化なりと。

此義を説んに。われら神を拜すべしとの信心起らざる間は。顔に帽子をかけて鏡に向ふが如く。神の神たるを認ると雖なり。然るに一旦信心の念起る時は。恰も素顔にて明鏡に向ふが如く。神の御榮光を歴然る拜し。信心いよ〳〵堅固なるに從ひ。其御榮光を拜することもいよ〳〵明らかなり。竟に此身此體が神と同じ像となるとの意味なり。譬へば君子德行の人と常に其起臥を借に。遂には其者の氣質。風采。容貌までも。其君子德行の人に相似るが如し。むかし摩西。西乃山にて。四十日四十夜。神に拜事へ親しく其御榮光に接してのち山を下りしに。其麗しいすらゐる人民は仰ぎて其顔を見る能はざりしと云ふ。神の榮光の摩西の顔に輝き居たれば

り。創世記。第五章。一節より曰く。神人を造り玉ひし日より。神の象りて之を造り玉ふ云々と。然らば神のをもかげい。元來人間の衷に在るものなり。しかるに我等慾心に惑ふて。其明德を發揮せざるが故に。折角の神の象も終に其正体をあらはすに由なく。空しく深海の玉の如くに埋沒す。もし之をして神を認めしめ。其大元の靈に相向ふを得せしめば。水と水と相引くが如く。鏡と鏡と相照すが如く。燦然としてこゝに其光明を發せん。これを人の眞心といふ。摩西の顏のかゝやきしい。則ち衷なる神の像が外なる神の像に照されて。其同じ像に化れるなり。嗚呼人の眞心神と相對して相感應するより大ひなるいなし。其理最も明白なりと謂つべし。故に曰く。人の眞心い神を拜するによりて初めて立つと。

たびでの詩に曰く。愚なるものは心のうちに神なしといへり。彼等は憎むべき事をなせり。善を行ふものなし。えぼは天より人の子をのぞみて悟るもの。神を尋ぬる者ありやと見たまひしに。こゝな逆き出て盡く腐れたり。善をなすものなし。一人だになし。不義を行ふ者は智覺なきか。かれらは物食ふ如く我民を食ひ。又えぼはを呼ぶことをせざるなりと。

基督教問答　終

◎基督教の本領　基督教を信ずるの理由

明治二十八年四月十二日印刷
明治二十八年四月十五日發行

著者　東京麹町區上二番町十二番地　松尾音次郎

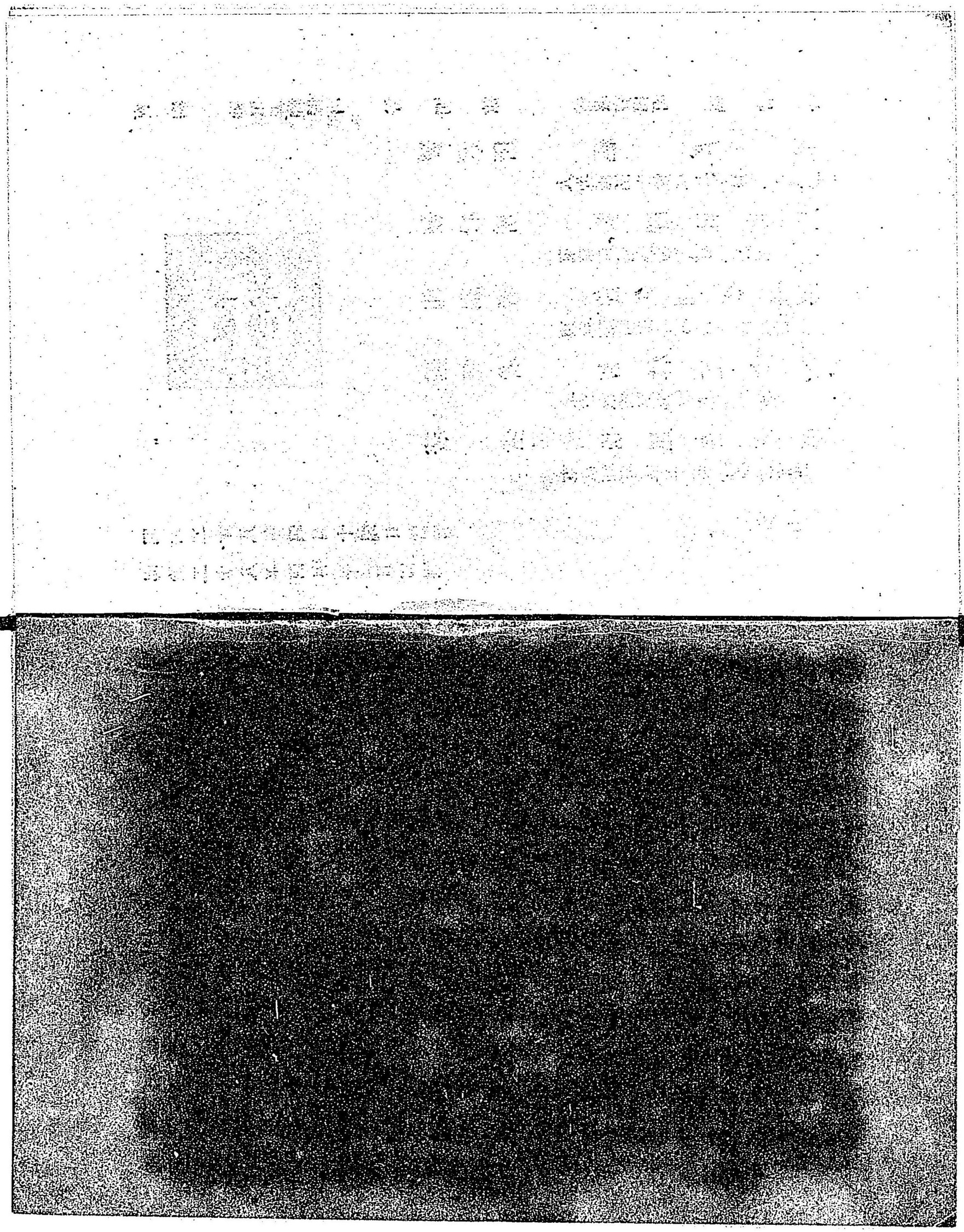
發行者　東京京橋區出雲町一番地　若林筌太郎

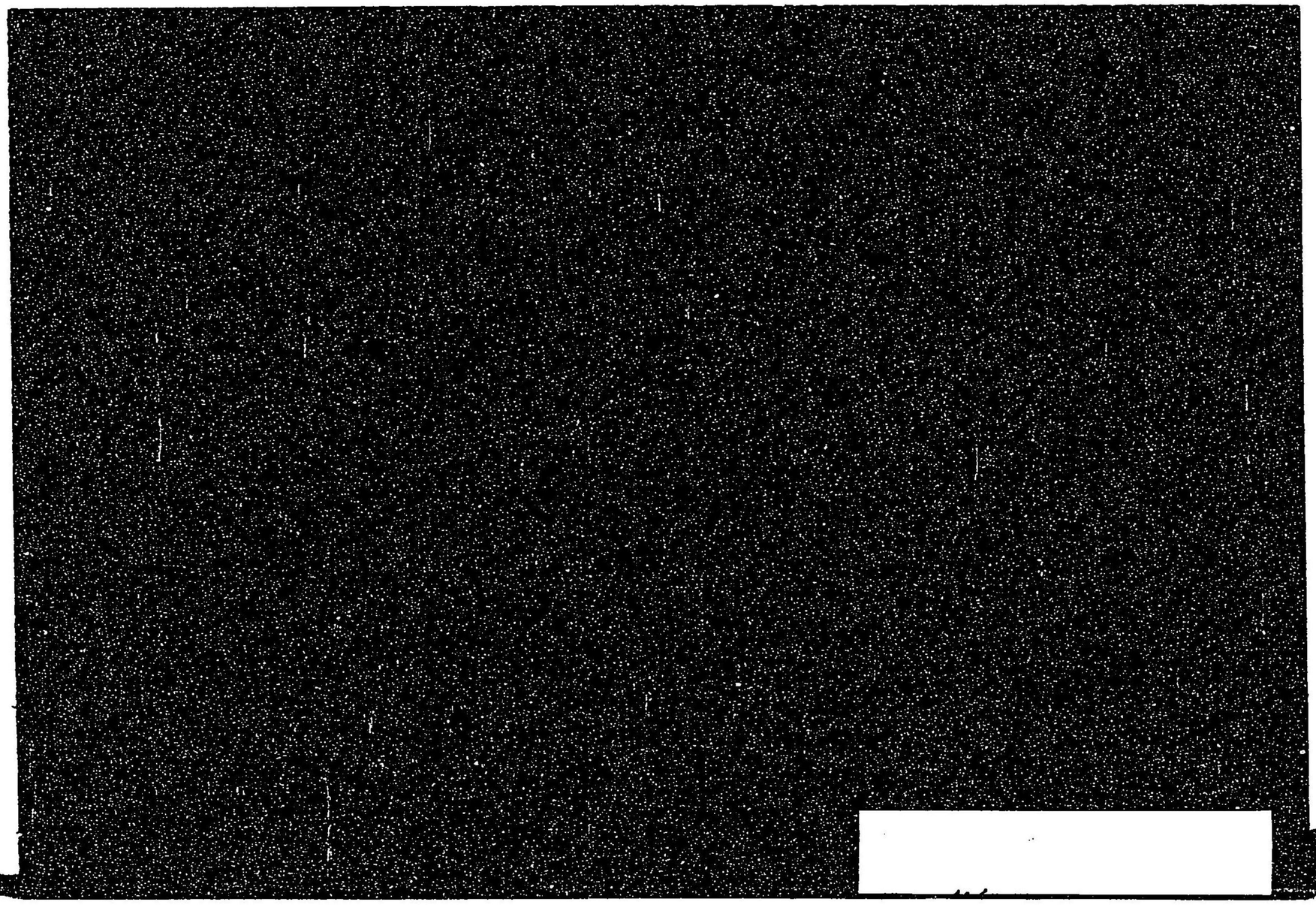
印刷者　東京麹町區麹町拾丁目四番地　佐久間金三郎

發行所　東京京橋區出雲町一番地　警醒社書店

發賣所　大坂西區土佐堀三丁目三十八番　福音社

賣捌　神田表神保町　好明館　横濱吉田町　福音舍





特 46
457

基督教問答

国立国会図書館

020519−000−2

特46−457

基督教問答

松尾　音次郎／著

M28

ABI−0332